

屋外の遊び環境調査報告

～子どもの主体的な活動を保障する屋外環境に着目して～

山下 晋¹ 米窪 洋介¹ 渡部 努¹ 町田 由徳¹ 小原 倫子²

Susumu Yamashita¹ Yosuke Yonekubo¹ Tsutomu Watanabe¹

Yoshinori Machida¹ Tomoko Obara²

[要旨]本研究では、岐阜市内で開催されている「ぎふ☆森のようちえん」と、自然に囲まれた特徴的な園庭を持つ「あさひこ幼稚園」における屋外環境や、遊ぶ子どもの様子を調査した。その結果、共通している点は、自然環境を工夫して取り入れた教育を行っていることと、子どもたちの豊富な体験を保障するための人的環境が重要な役割を担っていることであった。

[キーワード]

幼稚園、屋外環境、自然、遊び

[Key words]

kindergarten、 outdoor environment、 nature、 play

[所 属] 1 岡崎女子短期大学 (Okazaki Women's Junior College)

2 岡崎女子大学 (Okazaki Women's University)

I. 目的

岡崎女子短期大学(以下:本学)は平成29年度私立大学研究ブランディング事業に採択され、「子ども好適空間」研究拠点の整備を行うこととなった。本学の幼児教育学科と現代ビジネス学科のそれぞれの研究・教育領域を結びつけ、「子ども好適空間研究所(愛称:hyggelab:ヒュゲラボ)」を設立し、本学独自のブランドとして確立して、研究成果を地域へ還元することを目指している。我々が理想とする子どもの空間(子ども好適空間)を「夢中になれる空間」「居心地がよい空間」「安心・安全な空間」とし、各教員の専門性を生かした取り組みを行っている。

我が研究グループは、屋外で木登りや水遊び、基地作りを通して、子どもたちがワクワク・ドキドキできる空間を子どもにとっての「屋外の好適空間」と捉え、県内外のプレイパーク(冒険遊び場)について事例調査を行ったり¹⁾、屋外の遊び空間を評価するスケールを作成してきた²⁾。

一方で、「教育環境としての園庭」という観点での調査は行っておらず、多くの子どもが日常の中

で多くの時間を過ごす幼児教育施設や休日にも開放している保育環境を調査することは、子どもの屋外の好適空間の視点を広げるために意義があると感じられた。

そこで、本研究では、特色のある園庭や屋外環境で活動している幼稚園や団体に焦点を当て、その屋外環境やそこで遊ぶ子どもの姿を調査し、自然を多く取り入れた環境の中で、どのような取り組みによって子どもの遊びを引き出し、学びを結びつけているのか検証することを目的とした。

II. 方法

本研究では、ぎふ☆森のようちえん(2019年5月26日)、あさひこ幼稚園(2019年5月29日)を訪問し、調査を行った。各幼稚園では、先生方に可能な限りご案内いただき、幼稚園の特徴的な屋外環境やプログラムについてインタビューを行った。なお、写真撮影に関しては、個人が特定できないようにすることで許可をいただき、写真撮影をした。

III. 結果及び考察

(1) ぎふ☆森のようちえん

2019年5月26日(日)、岐阜市長良川ふれあいの森で開催されていた「ぎふ☆森のようちえん」を見学し、運営に携わっている岐阜聖徳学園大学教育学部 水谷亜由美氏にお話を伺った。

ぎふ☆森のようちえんは、月に1回の開催であり、岐阜市内外から多くの方が参加している。ここでは「子どもが決めて、活動する」というように、子どもの主体的な活動を尊重している。しかし友人同士の間はもちろん、時には、子どもがやりたい活動があり「晴れて欲しい」と願っても、雨が降るなど、自己の主体性と自然の厳しさの間に、葛藤している場面も見られる。その際、保護者やスタッフは見守っていることが多いということであった。

また、スタッフは元職・現職の小学校の先生や幼稚園・保育所の保育者、大学の教員、地域のボランティア、大学生、保護者と多岐にわたっている。なお、保護者がスタッフを務める場合は、自分の子ども以外のクラスを担当することとなっていた。親子が一緒にいることで、本来の活動が子どもだけで楽しめなくなるためであり、保護者も最初は少し抵抗があるようだが、すぐに他の子どもともコミュニケーションが取れるようになることである。

ここでは、「山を歩くときは、先生より前に行かない」「声と目が届くところで遊ぶ」「棒を持って移動するときは棒を立てる」など比較的緩やかなきまりを設けていた。しかし、スタッフの経験してきた背景によっては、「棒は回収して移動する」などクラスによって異なることもあるそうである。しかし、スタッフ間では、それらを否定せず、その方法について相互に学び合いをしていた。その

ような多様性を受け入れるのも、森のようちえんの特徴であろう。

森のようちえんには「毎日実施するタイプ」「土日にイベント的に実施するタイプ」、園舎を持っている園がときどき森に来る「融合タイプ」などさまざまであるが、それらすべてを森のようちえんという寛容さや、制度に縛られていないところが良いとおっしゃる保護者もいるとのことであった。

ここでは、活動の前にスタッフミーティングを行っている。見学当日も、誰がどこのクラス(1クラス10~20名程度)を担当するかを確認したり、当日参加する子どもの姿を踏まえた上で、年齢ごとに一人一人に配慮した遊びを考え、注意しなければいけないことなどの情報共有を行っていた。自然環境を利用しているので、特に準備することは少ないとのことであったが、男性スタッフがターザンロープやハンモックを木に設置するなどしていた(この男性スタッフの子どもも、このようちえんに通っており、卒業後も、定期的にターザンロープの設置に参加しているとのことであった)。

[小学生クラス]

小学生クラスでは、まず、司会進行の担当を決め、その日に何をしたいのかクラスの意見を聞き、スケジュールを立てていた。その結果、イモリの池→山道→お寺→薬木の広場→昼食→ターザンロープ→反省会という流れで進めることとなった。

イモリの池では中に入ることはなかったが、木の棒を使って池の中の生き物を探したり、釣竿のようにして何か釣れないか試したりするなど、夢中で池の中を眺めている姿があった。お寺へ続く山道では、落ちている木の実を拾ったり、幼虫の抜け殻などを拾ったりするなど、自然物との関わ



図1: ぎふ☆森のようちえん 小学生クラスの様子

(左) 遊んだお寺にお礼を言う様子、(中) 色水を楽しむ様子、(右) 子どもたちが作った秘密基地

りが多く見られた。さらに、シダの葉っぱを鳥の羽に見立てて飛ばす遊びなど、山の中だからこそ楽しめる遊びも行っていた。

お寺では、お参りをしたり、池の鯉を観察したりと、それぞれ興味のあることに取り組んでいた。お寺を出る際は、遊ばせていただいたことに対して、お礼の挨拶することで教育的配慮もなされていた。その後、薬木の広場で昼食をとり、午後からはターザンロープを中心に色水遊びや鬼ごっこなどを楽しんでいた(図1)。様々な遊びを楽しんだ後は、始めの場所に戻り、振り返りの会を行った。小学生の振り返り会では、楽しかったこととして「ターザンロープ」「秘密基地づくりや改造(図1)」「鬼ごっこ(鬼ごっこの時に木の葉っぱを全身につけて隠れたことなど)」、来月したいこととして「秘密基地の改造」「秘密基地の食料(キイチゴ)探し」「鬼ごっこ(色鬼、隠れ鬼)」「色水づくり」「虫探し」など多くの声が挙がっていた。

このように、楽しかったことを発表するなど、子どもたちの思いを言葉で表現する取り組みがなされるとともに、危険な行為や注意することを、きちんと子どもに伝えていた。振り返りの会の最後には、山の神様にお礼を言って小学生のクラスは解散した。

[幼児クラス]

幼児クラスでは、中心になるスタッフが子どもたちのやりたいことを聞くとともに、その時期だからこそ経験できることをスタッフが提案しながら、子どもとの対話の中でスケジュールを構成していた。当日のスケジュールは、イモリの池→山道→薬木の広場→昼食→秘密基地遊び・ターザンロープ→反省会という流れになった。

イモリの池への道中にキイチゴが生えており、子どもが見つけたことをきっかけに、食べてみる

ことになった(図2)。キイチゴが熟していないために、子どもたちは一口食べると、「酸っぱい」「まずい」と言っていた。その姿を見たスタッフは、「まずいとか、酸っぱい、苦いって感じたら、すぐに口から出すんだよ。飲んでではだめだよ。」と話していた。子どもたちに自然物の味覚を経験するという機会を保障するとともに自分の身を守る方法を伝えていた。

イモリの池では、池の中にいるイモリを網で捕まえて、じっくりと観察したり、池の上に張り出した木の枝にあったモリアオガエルの卵を観察したりした(図2)。

その後は山道を通って、薬木の広場へ移動をした。薬木の広場で昼食を取り、その後は、以前に作っていた秘密基地作りを続けたり、秘密基地を使ってままごのようなやりとりをしたりして遊んでいた。子どもたちは、秘密基地を作っていたことをよく覚えており、秘密基地に行くと、すぐに遊び出す姿があり、子どもたちの遊びの継続性が見られた。中には、秘密基地で続けて遊ぶ子どもがいれば、小学生クラスの子どもたちと一緒にターザンロープで遊ぶ姿があった。

しばらく遊んだ後、幅50cm程度の水路に移動し、水遊びをした。水路では、葉っぱや草を流したり、近くにあった石を積み、水を堰き止めたりして遊ぶ姿があった。子どもたちは、どのようにしたら葉っぱや草がスムーズに流れるかを考え、石を使って水の流れを変えたり、石の大きさや形を考えて石を積み、水が流れないように堰き止めたりするなど、子どもたちが考えながら遊ぶ姿が見られ、スタッフは子どもたちの考えに共感しながら見守っていた。

水遊びをした後は、最初の場所に戻り、振り返りを行った。スタッフが子ども一人一人に感じたことや思ったことを聞きながら、スタッフと子ど



図2：ぎふ森☆のようちえん 幼児クラスの様子

(左) キイチゴ摘みの様子、(中) イモリの池の活動の様子、(右) 振り返り会の様子

もが対話的に振り返りを行っていた。また、次回の活動についても子どもたちの意見を聞き、期待が持てるようにしていた。子どもたちの意見として、「秘密基地作りの続き」「水遊び」「虫取り」などがあった(図2)。

活動中のスタッフは、子どもたちに問いかけたり、子どもの意見を引き出したりするような対話的な関わりや子どもの考えを否定せず、肯定的・共感的に関わる姿が随所に見られ、子どもたちが主体的に活動するための関わりがスタッフ間で共有されていた。

活動終了後に全体の反省会が行われ、各クラスの活動報告と反省がスタッフから報告された。その中で、ターザンロープで遊ぶ際、子ども同士の接触の危険があったこと、山道で石を転がす子どもがいたため厳しく指導したこと、大きな羽アリにかまれて出血した子どもがいたことが報告され、単に、声掛けで終わるのではなく、十分に指導し、安全第一でやっていくことが共有されていた。

その他、自然の中で楽しみを見つけるのが上手になってきたこと、水分補給も友人を見て各自でできるようになってきたことなど、この森のようちえんでの育ちが確認されていた。

きょうだい(兄:小1、妹:年少)で参加している保護者から、参加のきっかけは兄が年少のころに友達に紹介してもらったとのことで、住居の近くにはこのように遊ぶ場所がないので、自然の中で貴重な経験ができることがよい、また、子どもたちは虫取りなどの遊びに興味があると聞いた。

スタッフを務めている保護者は、この森のようちえんとは別に、家族や友人とこの公園で季節ごとに変わる様子を楽しんでいた。友人の中には、岐阜市にいながら、このような環境を知らない人、

遊具のあるところが公園であるという概念を持っている人も多く、子どもが何もなくて遊べるのだということに驚いたとのことであった。この森のようちえんを通して、子どもにどのような力をつけてほしいかを質問したところ、「何もなくて自分遊びで見つけてほしい」「気になったことは、とことんその時間でのめりこんで夢中になって、追及してほしい」との考えを聞いた。さらに、保護者についても、親子で森に行くようになったり、いろいろな友達と関わったり、森で何をしてもよいか分からないと言う保護者が森に親しめるようなきっかけになればよい、また、ここで経験した保護者が、他の場所で活動を広げてくれればよいと考えていた。

岐阜県内の大学に通う3名の女子学生がボランティアで参加しており、子どもの活動を支えていた。この学生は保育者を目指しているとのことで、屋外での子どもの活動に興味を持っているとのことであった。このボランティアをもう一度行ってみたいか、と質問したところ「参加したい」という回答が得られ、活動の魅力の深さを知ることができた。

(2) あさひこ幼稚園

2019年5月29日(水)、「あさひこ幼稚園(岡崎市桑原町)」を訪問し、牧原東吾先生からお話を伺った。

あさひこ幼稚園は平成18年度に岡崎市細川町から同市桑原町、村積山の麓に新築・移転した私立幼稚園である。周辺は自然環境に富んでおり、子どもは常に自然と触れながら生活ができる。自然に対する教育を行っており、教育の一環として、電力の購買制度で100%自然エネルギーの電力会社を選ぶなど、配慮がなされている。



図3: あさひこ幼稚園の園庭の様子

(左) 段差を活用した滑り台、(中) 斜面に植えられた実のなる樹木、(右) 雨水をためたタンクから水をとる様子

保護者のボランティア活動が盛んに行われており、その内容は、年長保育室の薪ストーブに使う薪の裏山からの調達、絵本の読み聞かせ、取材・報道の自由が保障されたPTA会報の作成、ひな祭り会やクリスマス会などの園との協働運営など多岐に渡っている。これらの活動によって、幼稚園と保護者がともに子どもを育てることができるうえ、保護者同士のネットワークも深まるなどメリットも多い。また、海外からの学生ボランティアも毎年多く受け入れており、この幼稚園の活動の多様さがうかがえた。

園の指導方針は3つの視点「①生活、②人との関わり、③遊び」を柱としており、指導計画についても幼稚園教育要領の5領域を基礎としながら、3つの視点で作成している。指導方針の3つの視点は教育課程によって保育者間、保護者間で共有され、明確となっている。園の主な活動は、子どもが自ら主体的に遊ぶ活動を中心にしながら、戸外遊び、飼育栽培、散歩、園外保育、絵本など9項目の保育者からの働きかけや、提案で行われる活動が取り入れられ、2つの側面から構成されている。

園舎は、園児が同じ空間にいることを感じられるよう、園庭を挟んで向き合っているようにしている。その園庭は地形の段差を利用し、二段に分かれており、すべり坂や階段で往来ができるようになっていた(図3)。また段差の斜面には、実がなる木が植えられている他(図3)、一部は羊の飼育エリアにもなっており、日ごろ子どもは動物のエサやりなどの世話を楽しんでいる。このような園庭が可能な理由の1つに、運動会を隣接する岡崎市立花園体育センターのグラウンドで行っていることが挙げられる。一般的に幼稚園や保育所では、運動会が伝統的に行われているため、広いスペースが求められることが多い。しかし、地域内で連

携を築くことによって広いスペースを園庭に確保しなくても、運動会などの行事は実施できるものである。

上の段の園庭には、比較的大きなサイズのブランコや鉄棒など単体の遊具が設置されている。この理由として、牧原先生は「子どもたちが遊具に遊ばれないようにするため」とおっしゃっていた。これは総合遊具に比べ、ブランコや鉄棒は子どもたちが遊び方を工夫する余地があるので良いという考えに基づいており、“遊び場”ではなく、“遊ぶ空間”を提供することを意識していた。また、園長がデザインした木製のデッキを園庭中央に配置していた。ここでは子どもが遊ぶ他、電源コンセントもあり、園長がパソコンを持ち込んで園児の遊びを観察しながら作業をすることもあるという。幼稚園や保育所の園庭遊具には、梯子の間隔やフェンスの高さなど安全のために基準があるため、専門機関に見てもらい、適合と評価を受けているとのことであった。

園庭の周囲には、クラス用の小さな畑があり、訪問時にはナスやトマト、オクラが栽培されていた。面白いことに子どもたちが、それらの野菜に“タコガール”“タコボーイ”、“ハートちゃん”など、愛情を持って育てるように、名前をつけていた。雨水は園舎の屋根の雨どいをつたって、タンクにためられており、これらの畑の水やりや自由遊びに使われている(図3)。その他、「たねうえば」という植物の種を入れる場所があり、七夕の時に食べたスイカ、豆まきの時のえんどう豆などを入れると、次にまた生えてくる様子を子どもたちが観察できるようにしてあった(図4)。

園舎の南東には、“あえて何もおかない”広場があり、オープンスペースを必要とする運動会の練習などができるようになっている。また、かまどが



図4：あさひこ幼稚園の園庭の様子

(左) たねうえば、(中) 屋外にあるかまど、(右) 園児が植えた苗に添えられた名前を書いた“旗”

あり、餅つきのために餅米を蒸したり、お泊り保育のときにカレーライスを作ったりする際に使用している(図4)。また、基本的には園庭の草取りをしておらず、子どもたちが自由に立ち入れる“ビオトープ”となっているとのことであった。

園舎の東側の農園では、年長児は自分で苗を植え、自分の名前を示した旗を立てていた(図4)。子どもと保護者の農園ボランティアによって草刈りなどの管理や栽培を行っている。園内で飼育している動物の糞を集めた堆肥所には、たくさんのカブトムシの幼虫がおり、子どもたちのとっておきの場所となっていた。

園庭から出たところは村積山である、概ね月に1回は園外保育で出かけている。散策路にはヤマミツバやイタドリなど多様な山菜が群生しており、栗の木が多いことから野生のサルに出会うこともあるという。子どもたちは図鑑を持って自然を観察したり、新茶を摘んだり、秘密基地を作ったりするなど、様々なテーマを持って自然を体感していた。また、年長児は、四季(春夏秋冬)の山の絵を描く活動を通して、季節の移り変わりや、風景の変化に気づくことができ、身近な自然への愛着がより深まる経験をするようになっていた。

この他にも、陶芸用に保護者と作った登り窯、子どもたちが“名前をつけた生き物”が死んだときに葬るためのお墓、園舎の下に潜り込んで秘密基地のように遊べる狭い空間など、他の幼稚園や保育所には見ることができない屋外環境を有していた。この園を設計する際、モデルや参考にした園庭は特になく、牧原先生自身の経験と理想が形になったと拝聴した。

IV. まとめ

ぎふ☆森のようちえんは幼稚園ではないが、幼児期・学童期の子どもを対象にした教育環境を提供しており、あさひこ幼稚園は明確な教育方針や信念をもって教育に取り組んでいる幼稚園であり、ともに屋外環境への工夫がなされた教育を行っていた。

屋外環境、とりわけ園庭に必要な環境の視点について、木村ら³⁾は、「挑戦する」「存分に試す、変化を感じる」「関わり合っつくりだす」「力を出し切る、発散する」「ほっとする、一息つく」を子どもが自ら育つ園庭に必要な環境のキーワードとして挙げている。また、秋田ら⁴⁾⁵⁾は、園庭の

物理的環境の豊かさを捉える指標として、園庭環境多様性指標を作成しており、「土や砂遊び場」「水遊び場」「菜園や花壇」「芝生地や雑草地」「樹木やつる性植物」「飼育動物」「築山や斜面」「遊具」「ひらけたスペース」「道具や素材」「休憩や穏やかな活動の場所」「日陰」「園庭と園舎のつながり」「保護者や地域の方との交流の場所」の15項目を挙げている。

今回、調査した2つの屋外環境においても、子どもたちに豊富な体験を保障するため、季節感に富む本物の自然環境を工夫して活用しており、多様な活動が展開される環境となっていた。実際、子どもたちが自分たちで遊びを創造し、挑戦したり、存分に試したり、友達や保育者、スタッフなどと関わり合っつくりだしたり、全身で思いきり力を発揮したりするような姿や、時には心を落ち着かせて遊ぶなどの子どもたちの多様な姿が見られた。

自然環境の中では、子どもも大人でさえも予想しないことや思い通りにならないことが多くある。そのようなことを子どもたちは葛藤をしながら、受け入れ、さらに解決のために考え、試行錯誤することを経験する。そこに、子どもたちの主体性があり、子どもたち一人一人の学びがある。今回、調査した2つの屋外環境は、子どもの経験を重視し、そこに子どもたちの心身の育ちを期待する信念を持った環境であることがうかがえた。

子どもの好適空間の1つとしての屋外環境を探求している我々は、これまで冒険遊び場を中心に研究を進めてきたが、この2つの屋外環境には、子どもの興味・関心や発達を踏まえた明確な教育の意図性があり、冒険遊び場とは異なる屋外環境を構築する視点を得ることができた。

さらに、工夫された屋外環境の上には、人的環境として、教育方針を明確に持つ保育者やスタッフの存在があることを感じた。

ぎふ☆森のようちえんでは、子どもたちの主体的な活動を支えるために、子どもたちへの関わり方を活動前にミーティングを行い、活動後にも振り返りを行っていた。あさひこ幼稚園においても、子どもたちの活動を保障するため、園としての教育方針を保育者が共通理解し、それに基づいて、指導計画が作成され、幼児教育が実践されていた。

今回の調査を通して、調査対象とした2つの環境は、自然体験を保障する物的な環境に工夫がな

されていることを強く感じ、その環境が子どもたちにとって、魅力的な環境になっていた。また、このような魅力的な屋外環境を生かすためには、人的な環境である保育者やスタッフなどの関わりも重要な一因になっていることがうかがえた。

今後も様々な子どもの遊びを保障する屋外環境を研究し、子どもが自ら育つ屋外の好適空間を構成する要因を探求し、広く発信していきたい。

[引用文献]

- 1) 米窪洋介、山下晋、渡部努、町田由徳、小原倫子 (2019) 「冒険遊び場 (プレイパーク) の調査報告～本学における『冒険遊び場』実施へ向けての調査～」岡崎女子短期大学『子ども好適空間研究』第 1 号、pp.80-87
- 2) 山下晋、米窪洋介、渡部努、町田由徳、小原倫子 (2019) 「屋外の遊び空間を評価するスケールの作成～屋外における子ども好適空間形成のための指標研究」岡崎女子短期大学『子ども好適空間研究』第 1 号、pp.11-19
- 3) 木村歩美、井上寿 (2018) 『子どもが自ら育つ園庭整備』ひとなる書房、pp.68-87
- 4) 秋田喜代美 辻谷真知子 他 (2018) 「園庭環境の調査検討：園庭研究の動向と園庭環境の多様性の検討東」京大学大学院教育学研究科紀要 (57)、pp.43-65
- 5) 秋田喜代美 辻谷真知子 他 (2019) 「園庭環境に関する研究の展望」東京大学大学院教育学研究科紀要 (58) pp.495-533

[参考文献]

- ・秋田 喜代美、石田 佳織 (2019) 「園庭を豊かな育ちの場に：実践につながる質の向上のヒントと事例」ひかりのくに

[謝辞]

本調査及び文章の確認に多大なご協力をいただいたあさひこ幼稚園、ぎふ☆森のようちえんの先生方、関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

[付記]

- ・ぎふ☆森のようちえん
<https://imamitsu0906.wixsite.com/hoshinok>
- ・あさひこ幼稚園
<http://asahiko.kids-site.net/okazaki/>

(URL は 2020 年 3 月 1 日現在)

本論文は、全章にわたり共同で執筆したため、執筆担当の抽出は不能である。